

ヒトにおけるイヌの表情認知—ヒトは何を手がかりにイヌの表情の情動価を評価するのか？—

氏名 富所菜々花

指導教員 瀧本彩加

他者の情動を認知することは社会生活を送るうえで適応的である。その情動認知の際に優先的に手がかりとして利用されるのが表情である (Tanaka et al., 2010)。ヒトは他の動物ともパートナー関係を築いており、特に密接な関係性にあるイヌとは相互に表情認知をおこないコミュニケーションをとっている (Bloom & Friedman, 2013; Müller et al., 2015; Nagasawa et al., 2011)。また、ネガティブな情動の一種である恐怖の表情認知の際、目を意識的に見ることで、正しい情動を読み取ることが可能になることが示唆されている (Adolphs et al., 2005)。つまり、表情認知の際の目の注視率は円滑なコミュニケーションの構築に寄与すると考えられる。これまでに、ヒトのヒトに対する表情認知における注視部位の検討や、ヒトが古くからともに暮らしてきたイヌの中立表情を見る際の注視部位の研究はなされている。しかしながら、ヒトがイヌの情動を伴う表情を認知する際に注視する部位について検討した研究はまだない。そこで本研究では、イヌの情動が表出された顔画像を呈示し、ヒトがイヌの表情を認知する際に顔のどの領域を手がかりとして用いているのか、その注視部位にイヌの飼育経験 (あり・なし) や種 (ヒト・イヌ)・情動価 (ポジティブ・ネガティブ) が影響するのかを検討した。また、注視部位が表情認知の正確性に関連するのかを探索的に検討した。分析の結果、飼育経験あり群の参加者におけるネガティブ条件で、イヌ刺激でよりもヒト刺激で目の注視率が有意に高かった。つまり、飼育経験あり群の参加者は、イヌのネガティブ表情を認知する際に、ヒトのネガティブ表情を認知する際よりも口を長く注視していたのである。また、ヒト・ネガティブ条件において、目の注視率が低い群の参加者は高い群の参加者よりも正当回数が有意に少なかった。つまり、ヒトのネガティブ表情の認知において、目の注視率の高い人は低い人よりもより正確に情動を認知していた。しかし、本研究では、最も関心のある、ヒトのイヌに対する表情認知の際の注視部位に対する情動の影響や、注視部位がヒトのイヌに対する表情認知の正確性に与える影響については確認できなかった。今後は、そうした予測を再検証するためにも、より自然な状況下での実験や適切な分析を試みたい。また、対象とする種や情動の種類を増やすことで、ヒトにおける表情認知のメカニズムについて精緻に検討し、ヒトが異種個体とうまくコミュニケーションをとるための手がかりについても検討したい。